

流木・廃材等を利用した オブジェで表す世界観

いずれもかなりのインパクトを持つ力作である。以前の静物とも心象風景とも取れるイメージの油彩は中世のヨーロッパの様式美を彷彿させた。こうしたイメージを裏切るように阿部氏の作品は土俗的な精神性を増し、画面は大きくうごき出す。流木との出会いが決定的だったというが、他に麻布、藁など、風化された自然物の廃材などに美を見出し、それらを組み合わせながら、石粉粘土やアクリル絵の具とあわせて制作する構成的オブジェ。さらに表現を完成させるために思い至ったのが、会場に仏像などの彫刻を配置することだったという。

場内は「輪廻」や「鎮魂」といった仏教的世界観が感じられ、「色即是空」というテーマで現在の心境を表す。

オブジェに向き合うと、作家が「朽ちていくものの美しさ」と表現するように廃材ならではの調和が見られ、洗練された近代都市空間とは対極の、古



めかしくも懐かしい絵肌や表情が何かを語りかける。

中学教員として、授業や部活動の美術教育に心血を注ぐ。中学生の多様な表現からの刺激も自己の制作のエネルギーへと昇華させながら、教育者と造形作家を両立させるバイタリティーにあふれた日常から生み出された作品にぜひ向き合っていたきたい。

令和4年度 後期企画展

色即是空 阿部龍一展

(しきそくぜくう)

2022年
9月3日(土)
▼
11月30日(水)

おでんせプラザぐるーぶ3F 北上市生涯学習センター ミニギャラリーにて関連作品展示

企画展の関連作品の展示を生涯学習センターミニギャラリーで行っています。

利根山光人記念大賞展の受賞作品も定期的に展示替えて公開するなど、美術館事業に関する展示スペースとして活用を図りますのでぜひご観覧ください。



中期企画展「佐藤清美展」の関連展示



「太陽の画家」利根山光人にちなんで、市民に思い思いの「太陽の絵」を描いてもらい、それをつなげて巨大アートにしよう！というのが「美術館へ行こう！つながる太陽プロジェクト」だった。秋も深まる昨年11月の企画。館に準備したアクリル絵の具やクレヨン、マジックなどで白い布に描かれる太陽は実に多彩でユニークだった。来館者の皆さんをはじめ、小・中学校その他の団体の協力も仰ぎながら合計128枚の太陽が完成した。

この共同作品を展示するスペースを提供していただいたのが、その前年にオープンした「保健子育て総合福祉施設 hoKko (ほっこ)」という市中心部の新施設だったということが大きい。美術館の役割が芸術文化の普及にあるのだとすれば、こうした館外施設でARTを楽しむことができる企画の開催は画期的だった。その中央階段の壁面に設置された横15メートルの大作は圧巻であった。大陶壁画の制作でも知られる画伯にちなんだこの展示環境は願ってもないもので、大成功と言えた。

時代と共に美術館の役割も多様化しつつある。「さあ見に来なさい！」と構えて待つものではなく、市民の目線に立ち、市民がARTに触れるきめ細かな環境づくりが現代の美術館の大きな課題ではないだろうか。参加型の企画、ワークショップの開催、来館者へのレクチャーやトーク、学校との連携など、発信のあり方も多様化している。

「つながる太陽プロジェクト」は、これまで開催してきた親子参加企画「秋の美術館まつり」がコロナの影響で中止せざるを得なかったことの代替え措置でもあったが、期せずして形を変えて市民を巻き込み、発展したイベントとなった。100年の記念事業の締めくくりとして、主催者側としてはかなりの達成感があった。

この作品展は2022年の3月いっぱい開催され、こうして記念事業は終わった。一年前のこの時期は「利根山光人生誕100年・開館25周年記念事業」を迎えるにあたり、構想のすり合わせに苦労する面もあったが、めまぐるしくも充実感ある事業の展開だったと言える。

さて、話は2021年の春に戻る。(次号につづく)

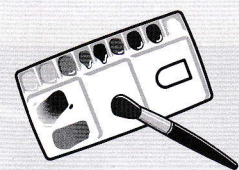
専任研究員



令和4年度 利根山光人記念美術館絵画教室 修了作品展のご案内

令和4年9月17日(土)～10月1日(土) 10:00～21:00

おでんせプラザぐるーぶ 3F生涯学習センター ミニギャラリーにて



4月に開講した今年度の絵画教室は、9月10日に10回の講習を終え、9名の受講生が修了証書を手にする予定です。水彩画・油彩画・色鉛筆画などで描かれた静物画や風景画の力作が完成します。修了展には当館専任研究員の作品や利根山画伯の作品も展示されます。併せてぜひご観覧ください。